

コメニウス『世界図絵』の 「第II部」における諸問題

井ノ口淳三

On the “Orbis sensualium pictus—part II”

JUNZO INOKUCHI

Abstract

The purpose of this paper is to consider about some problems of the book “Orbis sensualium pictus—part II” in 18th century. It was published in 1719, therefore it was not written by J.A.Comenius, but by Wolfgang Christoph Deßler. He was a deputyheadmaster of the Saint Spirit School attached to the new hospital in Nuremberg. The new preface of “Orbis sensualium pictus—part I” in 1746 made the matter clear. But it had been believed till 20th century that the author of the book “Orbis sensualium pictus —part II” was also J.A.Comenius. Because of no telling the name of the author, the publisher, Martin Endter made a lot of profit.

Then in “Orbis sensualium pictus—part I” in 1658, J.A.Comenius intended that the book was useful for teaching and learning languages and things. But I think that Wolfgang Christoph Deßler did not intend so in “Orbis sensualium pictus—part II”. Because we can not find figure in Latin sentence, and figures are almost omitted from pictures, though “Orbis sensualium pictus” is characterized by same figure in picture and sentence. Moreover the description of the nature is missing from the contents of “Orbis sensualium pictus—part II”, as the table3 indicates. In short “Part II” is different from “Part I” basically.

What is the purpose of “Part II”? I think that it is for pupils to gain knowledge

about various occupations. Because there are many descriptions about the matter.

Even more important is that we find moral in every chapter of “Part II”. For further details of this, see the appendix. After all “Part II” is marked by moral. But I think that it produced an effect contrary to his intention, and it is different from the thought of J.A.Comenius. Moral education by Comenius was not forceful.

In any case the publication of many editions of “Orbis sensualium pictus” means great influence of Comenius.

Key words : J.A.Comenius, W.C. Deßler, “Orbis sensualium pictus—part II”,
moral education

1. 『世界図絵』の異版本

コメニウス (Comenius, Jan Amos Komenský 1592-1670) の『世界図絵』(1658年)は、「世界最初の絵入りの教科書」として歓迎され、出版の翌年に早くも英訳本がロンドンで刊行されるなど、コメニウスの生存中にすでに多くの異版本が出されている。『世界図絵』を含めて、生存中に出された彼の著作の翻訳に関して、その都度コメニウス自身の理解が取り付けられていたわけではないにせよ、その内容が原著と極端に異なっているようなことはほとんどない。

コメニウスの著作をいろいろな国の言葉に翻訳して出版するというこの傾向は、彼の没後も続いた。そして没後に出版された著作の中で『世界図絵』の異版本を例にとると、著者の生存中よりも変化した内容のものが増加した。それらを変化の程度によって分類してみると、次の3通りのものが見られる。すなわち、①図版も文章もほとんど原著と同様のままで翻訳しているもの、②時代の変化に合わせて文章を一部加筆修正しているもの、③図柄を別のものに一新して、文章も改訂しているもの、である。この変化は、時の経過とほぼ対応している。つまり、後になるほど大きく変化していくという傾向がある。

さらにこれ以外に、『世界図絵』の形式のみを踏襲してはいるものの、内容は初版本とまったく異なるものがある。このタイプは、たとえば「新『世界図絵』」とでも呼ぶことにして、コメニウス自身による『世界図絵』と区別すべきものである。

本稿では、それらの中で最も早い時期に『世界図絵』の「第II部」と称して出版された18世紀のものを検討する。その内容を分析することを通して、当時において初版の『世界図絵』の特徴がどのように理解されていたか、あるいはどのような内容を補う必要があると考えられていたか、また教科書のあり方と役割がどのように考えられていたのかについて考察する。

2. 「第Ⅱ部」の出版

『世界図絵』の初版は、ニュルンベルクのエンター出版社から刊行された。これは、当時細かい図版部分の印刷技術を持っているところが他になかった、という事情によるものであった。その後エンター出版社からは、コメニウスが死亡するまでの13年間に合わせて14回も『世界図絵』が出版されていた¹⁾。この「第Ⅱ部」も一族のマルチン・エンター (Martin Endter, 1653-1741) によって、コメニウスの没後50年近くが経過した1719年に出版されたものである。そこにはどのような事情が介在していたのであろうか。

「第Ⅱ部」の刊行当初は、著者が誰であるかが明らかにされず、したがってこれもコメニウス自身が執筆したものという見方も生じたようだ。その後「第Ⅱ部」は、表1に示したように、

表1 『世界図絵』「第Ⅱ部」の出版状況

第Ⅰ部	第Ⅱ部
	1719年 (第 76版)
1720年 (第 77版)	
1724年 (第 82版)	
1729年 (第 86版)	
	1730年 (第 88版)
1732年 (第 89版)	
1737年 (第 90版)	1737年 (第 91版)
1740年 (第 93版)	
	1745年 (第 94版)
1746年 (第 95版)	
1746年 (第 96版)	
	1754年 (第 98版)
1756年 (第102版)	
1769年 (第108版)	1769年 (第109版)
1780年 (第125版)	
1781年 (第126版)	

() 内は、通算して何番目の異版本であることを示している。

Kult Pilz : Die Ausgaben des Orbis Sensualium Pictus, 1967.により作成

1730年, 1737年, 1745年, 1754年, 1769年と繰り返し刊行されたが, 著者の名前が明らかにされたのは, 1746年の「第Ⅰ部」(すなわちコメニウス自身による『世界図絵』)に添えられた「新しい序文」によってである。この間実に30年近い時が過ぎていたことになる。

その序文によれば, 「第Ⅰ部」の作者をコメニウスとし, 彼の著作が多くの国の言葉に翻訳されたことを紹介した後, 「もう一つを大変敬虔で教養のあるヴォルフガンク・クリストフ・デスラー (Wolfgang Christoph Deßler) 氏が制作した。彼は, ニュルンベルクの新病院附属聖心学校の副校長 (Conrector) であり, その恵まれた記憶力によって, 大変信心深く教養ある著作を滅びさせない人物である。その純粋なラテン語の文体がいかに力強く, そしていかに健全な倫理学になっているか, コメニウスの労作のこの続き自身が十分に証明している」と記されている。²⁾

しかし, 当時この記述の微妙な意味に気のついた人は少なかったようである。というのは, 「大変信心深く教養ある著作を滅びさせない」という表現は, コメニウス自身の原作を継承しているようにも読み取れるし, 「コメニウスの労作のこの続き」という表現も『世界図絵』と一連のものであるという印象を強めているからである。

『世界図絵』の研究で知られるクルト・ピルツ (Kurt Pilz) は, 「20世紀の図書館においてもなお18世紀のこの版の著者の名前がコメニウスになっているのを私は見てきた」と述べ, ヴェンデリン・トイシャー (Wendelin Toischer) が「第Ⅱ部」の著者をデスラーであると確認したのは, ようやく1913年のことであつたと記している。³⁾

このように, 形式は『世界図絵』と同様であるが, 内容にはコメニウスがまったく関知していない著作がコメニウスの作品だとされてきた背景には, 出版社のいわゆる営業上の配慮が感じられる。つまり, デスラーの著作とするよりもコメニウスの著作であると世間に思わせておく方が, はるかによく売れたであろうと推察されるのである。この点に関して, ピルツも先述の箇所で「(『世界図絵』を2分冊にすることによって) 出版社は, 書籍販売のより大きな成果を期待した」と記している。実際「第Ⅱ部」と銘打つことによって, それはあたかも「第Ⅰ部」の続編であるかのような印象を人々に与えた。そしてこの出版の際に「第Ⅰ部」の図版も一新され, 「第Ⅱ部」とまったく同じ様式の図版に統一されたので, 「第Ⅱ部」をコメニウスの著作の新版であると思ひ込む人がいたとしても不思議ではあるまい。「第Ⅱ部」を1719年に先に出版し, 逆に「第Ⅰ部」を1720年に続けて出版したのも奇妙なことだが, 結果的には「第Ⅱ部」への関心を高める効果があつたのだろうか。

それにしても今日の感覚でこの事態を受けとめた場合, もしコメニウスの没後50年近くも経過してから彼の新たな著作が出版されたとしたならば, 一種のセンセーションを起こすかも知れない。だが, 当時は疑われもせずそれで通用したのであろう。そしてその内容も後に紹介するように, それなりにまとまったものであり, まったくいいかげんな類似品というものでもな

かったのである。

3. 「第Ⅱ部」の特徴

「第Ⅱ部」の著者であるデスラー（1660-1722）は、1705年から1722年までの間聖心学校の副校長として働いた。この学校は、当時ニュルンベルクに三つあったラテン語学校の一つであった。したがって「第Ⅱ部」は、ラテン語学校の教師によって執筆されたものであるが、はたしてこれがラテン語学習用の教科書として作成されたものであるかは疑問である。というのは、図絵に付された数字と本文中の数字とを対応させて言葉と事物を理解させるという『世界図絵』の特徴とも言える手法が、これにはまったく見られないからである。対応するラテン語文中の単語がイタリック体で表現されているものの、数字は一切添付されておらず、ただドイツ語の文においてのみ数字がみられる。しかも、図絵の中の数字はかなり省略されているのである。

また、初心者向きの教科書にしては、いささか細部の描写が詳しすぎ、日常あまり使用しないと思われる単語も少なからず見受けられる。さらに、『世界図絵』の文章はリズムカルなことで知られるが、「第Ⅱ部」にはそうした配慮が乏しいように思われる。これらのことからこの「第Ⅱ部」は、言葉の習得よりも内容の理解に重点をおいたものではないかという見方が生じるのである。

そこで次に「第Ⅱ部」の内容を検討することにしよう。著者のデスラーは神学者であった。1660年2月11日にニュルンベルクで洗礼を受けたという記録も残されている。けれどもこの「第Ⅱ部」の内容には、宗教的な要素はほとんどうかがえない。これは『世界図絵』が、神に始まり神に終わったことや、聖書に関連する記述が織り込まれていたことと異なるものである。デスラーの関心はそこにはなかったのであろうか。また、自然界の描写もほとんど見られず、この点においても『世界図絵』とは立脚点を異にしているように思われる。

ここで、「第Ⅱ部」の構成を紹介すると、次の通りである（より詳しくは表3を参照されたい⁶⁾）。

- 「1. 歌」から「8. ダンスの達人」までの8項目は、「芸術とスポーツ」に関する事柄。
- 「9. 炭焼き」から「17. 火を食って見せる奇術師」までの9項目は、「火」に関する事柄。
- 「18. 井戸堀り」から「21. 井戸の達人」までの4項目は、「水」に関する事柄。
- 「22. 水夫の船出」から「32. にしん漁」までの11項目は、「海」に関する事柄。
- 「33. 琥珀採集」から「62. 釘職人」までの30項目は、「金属」に関する事柄。
- 「63. 毛織物作り」から「82. ひも製造職人」までの20項目は、「衣生活」に関する事柄。
- 「83. ガラス工房」から「94. 舗石職人」までの12項目は、「住生活」に関する事柄。
- 「95. 火薬工場」から「108. テント職人」までの14項目は、「戦争」に関する事柄。
- 「109. 詩人」から「111. 木型作り」までの3項目は、「文芸」に関する事柄。

「112. せっけん製造職人」から「129. 酢醸造」までの18項目は、「食生活」に関する事柄。

「130. 弦楽器職人」から「143. くじを入れた壺」までの14項目は、「教養・娯楽」に関する事柄。

そして最後の「144. 使者」から「150. 手品師」までの7項目は、「その他」の事柄となっている。

これらを見ると、「火」「水」「土」に関する要素や「衣」「食」「住」に関する内容があわせて93項目と、全体のおよそ3分の2を占めている。

しかし、その配列は『世界図絵』において見られたほどの系統性を感じさせない(表2参照)。特に最後の7項目は、『世界図絵』と同様の150項目にするための作為さうかがわせるものである。

以上のことからこの「第II部」の基本的な性格は、「職人づくし」⁷⁾や「職人図絵」⁸⁾の延長上にある作品と考えられるのである。本稿の最後に、この三つの作品に共通する職業である「錠前師」「毛皮製造人」「石工」「料理人」の項目についての試訳を紹介しているが、これらはいずれも衣・食・住という人間生活の根幹を成すものである。このような内容構成からすると、著者の関心はもっぱら人間界に集中し、とりわけ職人の仕事ぶりについては、コメニウス自身の『世界図絵』よりも詳しく説明されている⁹⁾。

けれども、初心者向きの教科書であることを考慮すれば、詳しいことが常に良いかどうかは検討の余地が残されている。いたずらに「教育的な配慮」を施されることによって、かえって理解が妨げられるという恐れもないわけではないが、少なくともコメニウスの場合には、系統性への配慮がなされるにつれて、網羅的な教科書から脱却し、むしろ精選への志向が強められたといったという経緯がある¹⁰⁾。したがって、この「第II部」が、『世界図絵』に込められたコメニウスの意図をよく反映したものであったのか否かと問われたならば、筆者は否定的にならざるを得ないのである。

4. 「第II部」の徳育的性格

それよりもさらに重要な問題は、次の点にある。先に紹介した1746年版の「第I部」に添えられた「新しい序文」を思い出してみると、そこには「(「第II部」が) いかに強く健全な倫理学になっているか」という表現があった。これはいったい何を意味しているのか。実はこの「第II部」では、150ある項目のすべてにおいて、本文が一段落した後の文末に、道徳的な内容を込めた文章が必ず数行付加されているのである。その様式について本稿の末尾に付した試訳を参照していただければ幸いであるが、これは『世界図絵』にはまったく見られなかった「第II部」だけの特徴である。

しかし、筆者には、著者デスラーのこの意図と工夫が成功したとは思われない。道徳的な内容を込めた部分は、本文に使用された単語のごく一部をくりかえし使用して関連性を持たせようとしてはいるものの、実際には本文とほとんど関係のないことを、いわばこじつけとも思えるような形で強引に主張しているのにすぎないのである。

当時この本を読んだ子どもたちは、これを楽しむことができたであろうか。各項目ごとに登場する教訓と説教に、むしろうんざりしたのではないかと憂慮する。もしコメニウスが「第Ⅱ部」のこの部分を見たとしたら、どのように思ったであろうか。おそらく彼はこの部分の削除を求めたのではあるまいか。というのは、事物と言葉を結びつけて学ばせる絵入りの教科書の中に、このような形で挿絵を必要としない徳目を盛り込むことは、コメニウスの本意ではなかったと考えられるからである。¹¹⁾

この「第Ⅱ部」の著者である神学者デスラーは、キリスト教の信仰に関する書物を当時すでに何冊も出版していた。もし彼が倫理学の書物も必要であると考えていたのなら、それは『世界図絵』の形式を借りずに、別の形で出版すべきであった。なぜなら、この道徳的な内容の部分は、まったく図や絵との関係を持っていないからである。それゆえドイツ語の文章にも道徳にかかわる部分には、図絵に対応する数字は一切添付されていない。つまりデスラーが『世界図絵』の形式を利用しなければならなかった必然性は、本質的な面において少しもなかったのである。

以上のことからこの「第Ⅱ部」は、ラテン語の学習用でもなく、そうかといって事物の学習のためだけでなく、実は徳育をねらいとした性格の教科書ではなかったかと推察されるのである。表3に示した150の項目のすべてについて、道徳的な内容の文章を添えることは容易なことではない。その作業に取り組んだ彼の熱意は並々ならぬものがある。当時いかなる社会的な背景と必要性があってこのような徳育重視の構成をとったのかは定かではないが、デスラーの努力を考慮するとしても、その工夫を肯定的に評価することはできない。それはコメニウスの『世界図絵』が本来目指していた自然と社会のいろいろな事象に対するリアルな理解や、言葉の獲得を通しての認識能力の成長という理念を歪めることになると考えられるからである。

もちろんコメニウス自身も徳育を重視していたのであるが、少なくとも彼の場合には、このような不自然な形で教科書の中に徳目を忍び込ませるという方法によってではなかったのである。いずれにせよデスラーの「第Ⅱ部」の構成から、彼が『世界図絵』には徳育の要素が欠落しており、それを補わなければならないと考えていたことがうかがえる。

このようにして本来の『世界図絵』の意図から逸れた内容の著作が、その「第Ⅱ部」と称して刊行されたところに、18世紀においてなおコメニウスの影響力が存続していたと考えられるのである。

注

- 1) Kurt Pilz : Die Ausgaben des Orbis Sensualium Pictus, 1967, S.54.
- 2) Joh.Amos Comenii : Orbis sensualium picti Pars Prima, 1746, p.3.
- 3) Kurt Pilz : op.cit.S.171. なお、ピルツは、トイシャーの次の論文をしばしば紹介している。Wendelin Toischer : Zur Entstehungsgeschichte des "Orbis pictus"; in *Zeitschrift der Erziehung und des Unterrichts*. Berlin 1913, S.169-193.
- 4) Joh.Amos Comenii : Orbis sensualium picti Pars Secunda, 1759.
- 5) 『世界図絵』の1666年版（ニュルンベルク）には、各章ごとに聖書からの引用がなされているが、デスラーによる版にはその意図は見られない。
- 6) なお、ゲルハルト・ミヘルによる分類は、次の通りである。

章	職業のまとめり
1 - 3	教会の奉仕
4 - 8	宮廷の技能
9 - 17	火と光に関する仕事
18 - 34	水とその資源に関する仕事
35 - 62	金属に関する仕事
63 - 82	繊維製品と革に関する仕事
83 - 94	建築関係の手職
95 - 108	軍隊
109 - 111	書物の制作
113 - 129	食物
130 - 141	さまざまなまとまりのない職業
142 - 150	社会的に低いとされていた職業、たいていは「流浪の民」

Gerhard Michel : Schulbuch und Curriculum, 1973. S.76.

- 7) たとえば、ハンス・ザックス、ヨースト・アマン『西洋職人づくし』岩崎美術社、1970年。表4参照。
- 8) たとえば、石山 彰編『西洋職人服飾図絵』岩崎美術社、1989年。表5参照。
- 9) 先の分類にも示されているように、ミヘルもこの書物の基本的な性格を職業案内と見ている。そしてその背景として重商主義的なカメラリズム（Kameralismus）の思想を指摘している。Gerhard Michel : op.cit., S.78.
- 10) 拙稿「教科書観」、藤田輝夫編『コメニウスの教育思想』法律文化社、1992年。
- 11) 『世界図絵』の数多い異版本の中には、たとえば1738年発行の Cibinii 版のように挿絵のまったくないものもある。また、当時子ども向けの読み物には教訓がつきものであったとする見方もある。それにしてもゲーテの愛読したのは、どの版であったのであろうか。

引用文献

本稿において使用した『世界図絵』の各版は、次のものである。

○ Johannis Amos Comenii : Opera Omnia 17 Orbis sensualium pictus. 1658.

[1970年の全集版による]

○ Joh.Amos Comenii : Orbis sensualium picti Pars Prima, 1720.

[1746年版及び1781年版も参照]

井ノ口：コメニウス『世界図絵』の「第Ⅱ部」における諸問題

○ Joh.Amos Comenii : Orbis sensualium picti Pars Secunda, 1719.

[1754年版及び1759年版も参照]

1719年版及び1720年版は、「追手門学院大学短期在外研修費」の助成を受けて、チェコ共和国の国立博物館及びウヘルスキー・プロトのコメニウス博物館で閲覧した。

1746年版及び1754年版は、名古屋大学附属図書館で閲覧した。

1759年版及び1781年版は、「追手門学院大学特別図書購入費」の助成を受けて入手した。

なお、本稿の一部は、日本教育学会第54回大会（1995年8月25日、東京都立大学）において発表した。その際、小峰総一郎、藤田輝夫、佐藤令子、太田光一の各氏から有益なご教示にあずかった。ここに記して謝意を表するものである。

1995年9月27日 受理

表2 『世界図絵』 目次 (1658年)

1. 神	51. 捕鳥	101. 哲学
2. 世界	52. 狩り	102. 測量術
3. 天空	53. 肉屋	103. 天球
4. 火	54. 料理	104. 惑星の位置
5. 空気	55. ぶどうの収穫	105. 月の状態
6. 水	56. ビール製造	106. 日食・月食
7. 雲	57. 会食	107. 地球
8. 大地	58. 亜麻づくり	108. ヨーロッパ
9. 大地の作物	59. 織物	109. 倫理学
10. 金属	60. 亜麻布	110. 英知
11. 石	61. 仕立て屋	111. 勤勉
12. 樹木	62. 靴屋	112. 節制
13. 果樹	63. 大工	113. 勇気
14. 花	64. 左官	114. 忍耐
15. 野菜	65. 機械器具	115. 人間性
16. 穀物	66. 家	116. 正義
17. 灌木	67. 鉱山	117. 寛大
18. 動物と鳥	68. 鍛冶屋	118. 結婚
19. 家禽	69. 指物師とろくろ細工師	119. 親類関係の系統樹
20. 啼鳥	70. 陶工	120. 両親
21. 野鳥	71. 家の部屋	121. 主従社会
22. 猛禽類	72. 居間と寝室	122. 都市
23. 水鳥	73. 井戸	123. 都市の内部
24. 昆虫	74. 浴場	124. 裁判所
25. 四足動物および家畜	75. 理髪店	125. 犯罪者の身体刑
26. 家畜	76. 馬小屋	126. 商売
27. 役畜	77. 時計	127. 計量と重さ
28. 野性の畜群	78. 絵画	128. 医術
29. 野獣	79. 鏡	129. 埋葬
30. 爬虫類	80. 桶屋	130. 演劇
31. 這う虫	81. 綱作り人と革ひも屋	131. 奇術
32. 両棲類	82. 旅人	132. 格闘練習場
33. 川と湖の魚	83. 馬に乗る人	133. 球技
34. 海の魚と貝	84. 車両	134. 盤上遊戯
35. 人間	85. 運送	135. 競走
36. 人間の七つの年齢段階	86. 渡し場	136. 少年の遊び
37. 人間の身体	87. 水泳	137. 王国と属州
38. 頭と手	88. ガリー船	138. 王の尊厳
39. 筋肉と内臓	89. 貨物船	139. 兵士
40. 脈管と骨格	90. 難破	140. 陣営
41. 外部と内部の感覚	91. 書法	141. 軍隊と戦闘
42. 人間の魂	92. 紙	142. 海戦
43. 変形と異常発育の人	93. 印刷術	143. 都市包囲
44. 造園	94. 本屋	144. 宗教
45. 農耕	95. 製本屋	145. 異教
46. 牧畜	96. 本	146. ユダヤ教
47. 蜂蜜製造	97. 学校	147. キリスト教
48. 製粉業	98. 書斎	148. マホメット教
49. パン製造	99. 文辞	149. 神の摂理
50. 漁獲	100. 楽器	150. 最後の審判

表3 『世界図絵』「第II部」 目次（1719年）

1. 歌	51. 円環作り	101. 花火師
2. オルガン奏者	52. 穴あけ職人	102. 兵舎の設営
3. 神殿監督	53. やすり目立て工	103. 坑道
4. 調教師	54. 刃物師	104. 鼓手
5. 騎馬試合	55. 錐職人	105. 歩兵
6. 家庭教師	56. 針製造人	106. 旗手
7. フェンシングの達人	57. 留め金作り	107. ラップ手
8. ダンスの達人	58. 鉄職人	108. テント職人
9. 炭焼き	59. ブリキ職人、提灯作り	109. 詩人
10. 樹脂集め	60. 風車装置	110. 活字鑄造工
11. 松煙作り	61. 拍車職人	111. 木型作り
12. 硫黄配り	62. 釘職人	112. せっけん製造職人
13. 煙突掃除	63. 毛織物作り	113. 製塩業者
14. ろうそく職人	64. 染め物師	114. 宿屋の主人
15. ろうそく売り	65. 帽子職人	115. 料理人
16. 松明を持つ人	66. 多くの糸で織る職人	116. 飲食店
17. 火を食ってみせる奇術師	67. ふち飾り職人	117. パイ焼き
18. 井戸堀り	68. 金糸縫い取り師	118. 菓子製造人
19. 配管職人	69. 絹織物	119. パンケーキ職人
20. 洞窟	70. じゅうたん製造	120. 菓子屋
21. 井戸の達人	71. かつら製造職人	121. チーズ製造職人
22. 水夫の船出	72. ブラシ製造職人	122. 果物商人
23. 船大工	73. くし職人	123. 庭師
24. 帆柱作り	74. 毛皮製造人	124. 果樹園
25. 帆作り（24と同じ絵）	75. 革をなめす人	125. 園芸家
26. 錨職人	76. 羊皮職人	126. ぶどう栽培者
27. 提督	77. 油なめし職人	127. ぶどう酒商人
28. 海賊	78. コルドバ皮職人	128. 蜜酒職人
29. 水夫	79. 鞍製造職人	129. 酢醸造
30. ゴンドラの船頭	80. かばん職人	130. 弦楽器職人
31. 捕鯨	81. 袋物製造人	131. 笛を作る人
32. にしん漁	82. ひも製造職人	132. 弦を作る人
33. 琥珀採集	83. ガラス工房	133. ろう細工師
34. 真珠採り	84. ガラス職人	134. 羽根飾り師
35. 金銀細工人	85. 車大工	135. 紙に書く人と染める人
36. 宝石職人	86. ふるい製造職人	136. カード作り
37. 貨幣鑄造所	87. 箱製造職人	137. 玉突き遊び
38. 錬金術師	88. 石灰焼成業者	138. 香料入れ
39. 金箔製造職人	89. 石工	139. 人形作り
40. 地金職人	90. れんが製造職人	140. 狩人
41. 金属彫刻師	91. 石測定人	141. 鷹匠
42. 宝石彫刻師	92. 壁塗り職人	142. 市場
43. 銅器製造職人	93. 屋根職人	143. くじを入れた壺
44. 水差し製造職人	94. 舗石職人	144. 使者
45. 金めっき職人	95. 火薬工場	145. 編み物職人
46. 真鍮職人	96. 剣を磨く人	146. 靴直し
47. 金具職人	97. 鉄砲鍛冶	147. 木こり
48. 鈴職人	98. 弓製造者	148. 脱穀する人
49. 指輪職人	99. 鐘鑄造	149. 鍋の修繕をする人
50. 錠前師	100. 砲撃手	150. 手品師

表4 『西洋職人づくし』 目次 (1568年)

1. 教 皇	41. パン屋	81. 鞍 師
2. 枢機卿	42. 農 夫	82. 陶 工
3. 僧 正	43. ビールづくり	83. 鏡 師
4. 僧 侶	44. タカ匠	84. 研 師
5. 修道士	45. 仕立屋	85. 石 工
6. 巡 礼	46. 毛皮職人	86. 煉瓦工
7. 皇 帝	47. 染物屋	87. 大 工
8. 国 王	48. 織 工	88. 指物師
9. 君 侯	49. 帽子屋	89. 車 工
10. 貴 族	50. 靴 屋	90. 桶 屋
11. 医 者	51. 床 屋	91. 木 工
12. 薬剤師	52. 歯医者	92. 銃床づくり
13. 星占い師	53. 風呂屋	93. 羊皮紙づくり
14. 代言人	54. 鐘 師	94. ふるい屋
15. 活版師	55. 指ぬきづくり	95. 網づくり
16. 下絵師	56. 皮なめし	96. 船乗り
17. 木版師	57. 目鏡屋	97. 漁 師
18. 紙すき	58. 刷毛屋	98. 油 屋
19. 印刷師	59. 櫛 屋	99. ブドウ酒づくり
20. 型刷師	60. 羅紗屋	100. 歌 手
21. 製本師	61. 錠前屋	101. 針金づくり
22. 絵 師	62. コンパス屋	102. とめ金づくり
23. ガラス師	63. 刀鍛冶	103. リュートづくり
24. ガラス絵師	64. 拍車屋	104. 坑 夫
25. むいとり師	65. 銅 工	105. オルガンひき
26. 金細工師	66. 鉄抱鍛冶	106. ハープとリュートひき
27. 宝石師	67. 時計師	107. バイオリン三重奏
28. 彫刻師	68. 真鍮細工師	108. 笛の三重奏
29. 商人	69. 釘づくり	109. 軍鼓うち
30. 金貸し	70. 鎌づくり	110. じゅうたん工
31. 貨幣師	71. 甲冑師	111. 守銭奴
32. 金箔師	72. 蹄鉄師	112. 大食い
33. 小間物屋	73. 鉢づくり	113. 道化師
34. 袋物屋	74. 鈴づくり	114. がらくた売り
35. 皮細工師	75. 錫 工	
36. ひも師	76. 針づくり	
37. 肉 屋	77. よろい師	
38. かりうど	78. 弓 師	
39. 料理人	79. 秤 屋	
40. 粉ひき	80. 提灯屋	

表5 『西洋職人服飾図絵』 目次（1695年）

I 衣関係	32. パン屋	64. 研ぎ屋
1. テイラー	33. 女ケーキ屋	65. 刃物屋
2. ドレスメーカー	34. 糖菓屋	66. 刀剣研ぎ師
3. 古着屋	35. 菓子屋	67. 陶工
4. 下着屋	36. バター製造女1	68. 錫・陶商
5. 理容・かつら師	37. バター製造女2	69. ガラス器具・陶器屋
6. 女結髪師	38. 食料品屋	70. ろくろ師
7. 帽子製造人	39. 酢製造販売人	71. 城郭技師
8. 靴直し	40. 魚売り女1	72. 庭師
9. 靴製造人	41. 魚売り女2	73. 石工
10. 帯・ベルト製造人	42. 漁師	74. 配管工
11. 香水製造販売人	43. 居酒屋主人	75. 水道工事屋
12. 時計師	44. 喫茶店主	IV その他
13. 鏡・めがね商	45. ぶどう園主	76. 馬具・鞍工
14. 女宝石細工師	46. 女花売り	77. 蹄鉄工
15. 女金銀細工師	47. 女果物屋	78. 車大工
16. 金銀細工師	48. 鍋釜製造業	79. 活版屋
17. 毛皮屋	49. 女鍋釜屋	80. ろうそく屋
18. 羽毛商	50. 柵屋	81. コイン製造人
19. 女リボン屋	51. ざる・籠屋	82. 小間物行商
20. メリヤス編物業	52. ブラシ製造人	83. 内科医
21. リネン屋	53. 樽屋	84. 外科医
22. 織師	III 住関係	85. ヘルニア外科医
23. なめし皮屋	54. 建築家	86. 薬剤師
24. トランク・箱屋	55. 室内装飾業	87. 花火師
25. 木箱師	56. 女室内装飾業	88. 占星術師
II 食関係	57. 指物・高級家具師	89. トランプ屋
26. 料理人	58. 板ガラス屋	90. 画家
27. 肉屋	59. 黒檀・象牙・貝細工師	91. 彫刻家
28. 焼肉屋	60. 鋳物師	92. 楽士
29. 製粉業	61. 金物師	93. コメディアン
30. 耕作農夫	62. プリキ屋	94. 検事
31. パン焼屋	63. 錠前金物師	

50. 錠前師

L.
Serarius Faber, Claultrarius.
Der Schlosser.



彼らは、締め具、あるいは鍵を作る錠前師として、掛け金を作ります 1。

鍵のかかる掛け金、二重の鍵、締めひものついた鍵。同時にいろいろな錠を 2。

しかし、これらはしばしば合鍵によって 3、真の宝庫への扉を開けようとされます。だから、隠された鍵が余分に存在するのです。

棒の形をした鍵は 4、良いギザギザの歯を付けられます 5。

ここにいろいろなひも 6、門 7、扉の輪 8、取っ手及び荷物を運ぶために頭にのせる輪 9、戸のちょうつがい 10、があります。

錠前師は、立派で堅固な扉に 11、庭と広間の飾りのついた小さな扉に 12、あらゆる格子に 13、その技術を示します。

彼は、床下から熱する浴室の中で炉へ 14、かまどの底へ 15、鉄のかまどへ 16、土製のかまどへ 17、火を送ります。

そして台所用には、火かき 18、自動的に回転する鉄ぐし 19、あぶり器 20、小さい鉄ぐし 21、をつくります。

事務室か穴蔵は、彼に金銭箱を求められます 22。そこに鍵を必要とします。彼は、鐘をつるす枠組だけではなく、係船をつなぐための柱用の枠や、砲丸も用意します 23。

そして門を落とし格子で、あるいは鋸で守ります 24。

最後に錠前師は、穴蔵で樽を輪鉄で囲むために、そこへ下りていきます。

* * *

鉄は鉄のままです。時には熱く、時には水で冷やされます。このようにキリストも常にキリストとして示されるはずです。そしてその希望は、女神の上にしっかりと立ち上がるのです。

どれほど彼は十字架へとかまどを導かれたのでしょうか、だが慰めをもって再び冷まされるであります。

74. 毛皮製造人

LXXIV.

Pellio.



Der Kirchner.

毛皮製造人の手によって1, 毛の多い皮からいろいろな毛皮が作られます。

皮は、まず大桶に浸され2, 洗われ3, なめらかにされ4, よく乾かされ5, 裁断され6, そして縫い合わされます7。

彼はこの方法で、毛皮製品8, 上着9, 頭巾10, 女性用の帽子11, 手袋12, 帽子13, マント14, 夜用の胴着15, 胸甲16, をつくります。

彼は、さらにドレスの裏地を付けます17。

高価な毛皮は、イタチ、アルプスネズミ、ベニスのネズミ、黒テン、テン、カウウソ、山猫です。

アブラムシかシミ虫が、傷めたり毛をかじったりしないように、棒で追い払います。

* * *

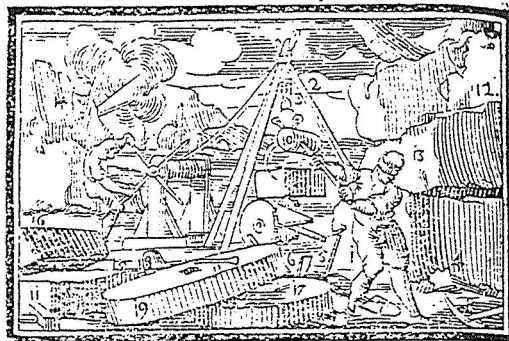
しつけの棒は、節制のない徳の背中で、墮落した怠惰から守ります。

そうでないと容易に巣くった悪徳になります。

それは良い毛を保つことと共通しています。

89. 石工

LXXXIX.
Lapidarius. Der Steinbrecher.



石工は1, 自分の道具とともに, 添え木2, 綱と滑車3, 木製と鉄製のくさび4, 長い鉄5, 鋏6, 鋤7, つるはし8, たがね9, 金槌10, 及び槌11, を石切り場で組み合わせます。

その場所で彼は, 石をつるはしで掘り出します13。

あるいは火薬で碎きます14。

そしてこのようにして, 四角い石15, 石材16, 石臼17, 境石18, 砥石19, を準備します。

* * *

たいていの場合, ある人を改良しようとすることが起こります。なぜならばその人は, 自分に向けられた寵遇に気づかず, 恩知らずな態度で不快感を与えるからです。

そしてそれは, 石工の目にしばしば小石を投げかけて, 彼を一人前に形成していく石と同様の方法でなされるのです。

115. 料理人

CXV.
Coquus. Der Koch.



注意深く、清潔好きで、料理に精通した料理人1。彼は、両面を洗われてつり下げられた清潔な亜麻布とともに2、前掛けを用意します3。

調理場で仕事をして、農家だけではなく、都会でも生活し、感謝と歓迎の念をもって待遇されます。

それから彼は、お金を持って行き、人が望むいろいろな食物を調達します。

病人のために、彼は、ワイン入りのスープ、ビール入りのスープ、サフランのスープ、良い香料の鶏スープ、いろいろな元気の出るスープ、ゼリー寄せ、薄味のゼリー寄せ、羊の肉をミルクと砂糖で煮たもの、をつくります。

その喜びは、飼い馴らされた生き物の肉を手に入れ、肉料理をし4、肉をあぶり5、乾かした牛の舌6、子牛の焼肉7、腸詰めソーセージ、子牛の腰肉、羊のもも肉、古い鶏と雛8、肝臓の肉汁、あぶられたガチョウ9、詰め物をしたガチョウ、あるいは同じものの肩肉、または薄い断片、もしくは若いガチョウの羽根肉、脚、首、肝臓を香辛料で味付けしたスープ、雌の鶏10、雄の鶏11、を料理することです。

彼は、野性動物の肉を求め、与えます。うさぎ12、鹿の尻肉13、猪の頭部14、鳥肉、しぎ、つぐみ、鴨、うずらです。

奉公人によって鱗を取られ、料理される魚は16、臓腑を取られ、解体されます。それは雄の成魚か、卵を持っているかのいずれかです。彼は、煮たり焼いたりあぶったり、いろいろな魚料理をします。料理人は、魚を器用に燻製する腕をみせます17。それは、前もって叩かれ、洗われています。カキ、及びいろいろなカニ18、それらを彼は、おいしく食べさせます。

いろいろなお菓子や果物について、私は何も語っておりません。

* * *

いなかの食事には、労働と休息とが組み合わさっています。それは、給仕と管理人とをぜいたくに使う大人物の食事よりもずっと健康的です。